

【第四回大会シンポジウム
神話と昔話―女性神をめぐる―】

中央ユーラシアの女神・女戦士

坂井 弘紀

はじめに

中央ユーラシアは、世界各地の民間伝承を研究する上で重要な空間である。東アジア、南アジア、西アジア、地中海世界、ヨーロッパ、いずれの地域とも歴史上深くつながり、大きな役割を果たしてきた空間である。ところが、世界の神話研究において、この地域がその視野に入ることはいまやなかったのではないだろうか。^①本稿では、中央ユーラシア・テュルク系諸民族^②の口承文芸、とりわけ神話・英雄叙事詩などに語り伝えられてきた女神や女戦士を紹介しながら、その特徴について考えてみたい。このことにより、他の地域の女神について、また世界各地の神話・伝承のつながりを考えるうえでのヒントを提供できるであろう。

一 女神と最初の女

中央ユーラシアのテュルクの人々は神話をもっているのだろうか。「テュルク諸民族には」古典神話は、「存在しない」^③、「イスラム化して、(中略)それ以前の文化、とくに神々に関する精神文化を否定し」^④た、あるいは「トルコ(テュルク)族の叙事詩においては神話的モチーフや宇宙的広がり、超自然の介入、荒唐無稽さが少ない」^⑤などと解されることもある。「ギリシア神話」や「北欧神話」のようなまとまりをもつ「パンテオン」はたしかに見当たらないかもしれない。神話が何を指すかにもよるが、シベリアのテュルク諸民族には創世神話が伝えられてきたし、中央ユーラシアの口承文芸のさまざまなジャンル(英雄叙事詩、昔話、伝説、儀礼歌など)に神話の要素を見出すことも可能である。中央ユーラシアの神話は「ジャンルの枠を超えた用語」ととらえると理解しやすいだろう。自然崇拜やテングリ(天空神)信仰、シャマニズムを古くから重視してきた人々にとつて、それらに基づいた世界を舞台とする伝承には、神話的な要素が随所に滲むのである。

一 一 母神ウマイ

ユーラシアの最も重要な女神のひとつは女神ウマイである。^⑦ウマイは、南シベリアを中心として、ユーラシアの東西の諸民族に広く共通する生命の母神のことで、「ウマイ」という語は南

シベリアを中心に、西は中央ユーラシア、東は内モンゴル、中国東北部にまで共通に認められる。⁸この女神は、アルタイやカス、シボルなど南シベリア地方に顕著であるが、カザフやクルグズなど中央アジア、チユヴァシユやタタールなどヴォルガ・ウラル地域、カラチャイ・バルカル、アゼルバイジャンなどカフカース、さらにアナトリアまでの広範なユーラシアのテュルク諸民族地域に広がり、ウマイ・アナ（カザフ、ウズベク）、ウマイ・ビーチユ（カラチャイ・バルカル）、マイ・エネジ（テレウト・アルタイ）、アマ（チユヴァシユ）、オマジユ（トルコ）などのヴァリエーションがある。十一世紀にマフムード・カーシユガリーがまとめた『テュルク諸語集成』によれば、ウマイは「胎盤」を意味し、「ウマイに祈れば男の子が授かる」と信じられていたという。⁹

ウマイは、古来のテングリ（天空神）信仰に基づく、子供の誕生、成長と豊穰をもたらす母なる女神で戦士・兵士・ハン・女性を庇護し、上天神テングリの妻とも捕らえられていた。¹⁰アルタイやカザフでは、子供の守護精霊としての性格が強く、クルグズでは、豊かな収穫と家畜の増大をもたらし、家の炉と子供たちを守るものと信じられ、またウズベクでは、産婆は出産に際してウマイに祈った。ほくろは「ウマイの痕跡」といわれ、ほくろのある乳児は幸運とみなされた。クルグズの英雄叙事詩『マナス』には、マナスの出産にウマイが現れて、母の体を叩いて誕生を促す場面がある。

女神ウマイが登場する伝承としては、カザフに伝わる昔話『アユ・バトゥルとアイ・スルー』が代表的である。梗概は次のとおりである。

そのむかし、かつてない豪雪が大地を襲い、人々は絶え果てた。雪に埋もれていたアイスルウは大きな蒼いオオカミに雪の中から救出される。その後、蒼いオオカミは鬚気楼となって天に飛び去っていった。熊の毛皮に身を包んだ狩人アユ・バトゥル¹¹も災禍を逃れていた。アユ・バトゥルは彼女を見つければ、石の洞窟へ連れていき、看病する。だが、彼女は目を覚まさない。アユ・バトゥルは天に向かって嘆く。すると、天からフマイとウマイの二羽の鳥が飛んできて、赤と白の二つの石を落としていった。火打石であった。アユ・バトゥルがそれで火をおこすと、「白髪の母」の姿に変身したウマイが洞窟に入ってきた。ウマイの力によりアイスルウは目を覚ます。ウマイは「煙が囲炉裏から絶えぬ家庭をつくって子宝に恵まれますように！火が絶えませぬように！」と二人を寿ぎ、去った。やがて、アイスルウが陣痛に苦しむと、再びウマイが現れ、痛みを和らげた。それから二人は長生きをし、たくさんの子を産み、一族をなしたという。¹²

この昔話におけるウマイは、母性豊かな母神であるとともに、人間に火をもたらした「火の神」でもある。シベリア諸民族の

考えでは、一般に子ども守護神である女神は「火の神」であるが、カザフの伝承からもそのことがわかる。天から火をもたらしことから、ウマイと日本のアマテラスとの比較も可能であり、このことはユーラシア大陸における女神について考える上で重要なポイントである。

母神ウマイは、アイスルウとアユ・バトゥルが酷寒を避け、身を寄せる洞窟の中に現れた。ウマイという言葉は、古代テュルク語では女神の名前のほかに、「胎盤」や「母の腹」も意味し、またエヴェンキ語やモンゴル語の「オメ」（子宮）もこれと通じるものと考えられる。アイスルウが冬を過ごした洞窟は、モンゴルの「エヒン・オマイ эхин омай」（母の子宮）という洞窟にたいする信仰と重なり合うだろう。この昔話には、狩猟文化の中で発達した洞窟信仰の残滓も見出すことができるのである。

ウマイとともに天から洞窟に降りてきたフマイは、イランや中央アジアに伝わる神話的霊鳥フマイ／フモと理解できる。フマイについては次の節で詳しく見てみよう。

一 二 聖鳥フマイ

中央ユーラシアには、イラン由来のフマイという聖鳥にまつわる伝承がある。ペルシア語ではフマー *Humā* という。フマイ／フマーは「神話的鳥、最高の種類の鷲、不死鳥、天国の鳥で、決して地上に降り立つことなく、絶えず上空高く飛翔している。

もしも誰かの頭がその影の下に入ったら、皇帝になり、幸福になると言われる」、あるいは「人の頭の影にフマイ鳥が降り立ったり、この鳥がとまったりしたら、その人は幸福になると言われていた」などと説明される。英雄叙事詩『エル・トストウク』など、クルグズやカザフの民間伝承に登場する、世界樹に営巣するアルプ・カラクスやシムルグとならんで、フマイも中央ユーラシアの代表的な鳥のキャラクターなのである。ちなみに、ウズベキスタン共和国の国章の中央にはフマイ *Humo* が描かれており、まさに国家の象徴となっている。

フマイは前節であげた女神ウマイと同一視されることがある。ウマイという言葉は、「世界樹に住む鳥フマイ」に由来するとい¹⁶うが、これとは反対に、フマイ鳥の起源は、「古代テュルクの女神ウマイの像に起因する」と、フマイがウマイに由来するとの説もある。先にみたように、ウマイの語源は、「子供の靈魂」や「胎盤・母胎・子宮」などを表す、ウメやオメなど、テュルク・モンゴル・トウングース系の言葉に求められるだろう。カザフの昔話『アユ・バトゥルとアイ・スルー』でも、フマイはウマイと並び、別の存在、異なるキャラクターと描写されていることから、両者はやはり由来の異なる別々のキャラクターと理解すべきである。名称や役割の類似が混同の原因となったのである。フマイは子どもたちや彼らの暮らす世界を案ずる「母鳥」として描写されるが、そうした母性もウマイとの混同を招いたと考えられる。

バシユコルト（バシキール）の英雄叙事詩『ウラル・バトゥ
ル』のウラル主人公の妻フマイも母性豊かな、白鳥にもなる天
女であり、女神の性格を強く示す。フマイは、天界の皇帝を父
に、太陽を母にもつ、「不死身の体」のキャラクターである。人
間に捕らわれた彼女は言う。

「私の肉を食べてみても、わたしを噛み碎き飲み込んでも
食べ物になることはありません。食べてもわたしは吸収
されません。

『命の泉』から水を汲み、そこで沐浴したからです。

あなた方みんなが知っている、みんながその光を浴びる
太陽というのはわたしの母です。

サムラウという王の、フマイという名の娘はわたし。

黄金の髪をなびかせて、光でわたしの国を埋め尽くす。

昼は大地に光を注がせ、夜は月の明かりで照らす。」

フマイはそのすばらしい翼を羽ばたかせた。三枚の羽が
落ちた。

その翼から流れた血が大地を染めると、三羽の白鳥がやつ
てきて、

その娘を連れて、飛び去った。⁽¹⁹⁾

三羽の白鳥に連れられて、天界に戻るさまは、中央ユーラシ
アに広がる「天人女房譚」にもしばしば描かれる。ここでのフ

マイは、天女ベリと重なるものである。⁽²⁰⁾

『ウラル・バトゥル』では、フマイは、主人公ウラルの死後、
息子たちに忠告を与えるため、天から地上に降りてくるが、そ
こには母神の要素が見いだせる。また人間にたいして、悪鬼デ
ヴによって汚された水を飲んでほならないと警告し、人間を救
うのは女神の役割そのものである。天界に暮らすフマイは名称
も役割もウマイと類似する。両者の混同はこうした理由による
のである。

一―三 原初の女性

ここで、女神ではないが、「最初の女性」を紹介しよう。アル
タイに伝わる「創世神話」には原初の女性エジが登場する。ま
ず、テキスト抄訳をあげよう。

一本の枝のない木を神が見て、「木に九本の枝よ、生えよ！」
と命じた。九本の枝が生えたと「九本の枝に九人の人間がな
れ！その九人の人間から九の部族が育て！」と命じた。そこ
に悪魔エルリクが現れて、「あなたの民を私にもください」と
頼んだが、神は拒絶する。エルリクは「神はどうやって創っ
たのだろう」と考えた。

エルリクは木の一方の側の実が食べられていて、もう一方
の側の実が食べられていないのを見て、尋ねた。「おまえたちは
一方の側の実しか食べないのか？」。すると人間が答えた。

「神様は『この四本の枝の食べ物は食べるな。太陽が昇る側の五本の枝の実を食べろ』と命じ、犬と蛇にコルモス(悪魔)が来たら捕まえろと命じました」と。コルモスのエルリクはそれを聞いて、木のそばに行き、トロンゴイという人間に「神がおまえたちに命じたことは正しくない。この五本の枝の実には食べるな。あの四本の枝の木を食べるのだ!」と言った。

そしてエルリクは蛇の中に入り、蛇の中で「この木に登れ!」と言った。その木に蛇は上った。神が人間に食べるなと命じていた実を蛇は食べてしまった。トロンゴイと一緒にいたエジという女に蛇はこう言った。「トロンゴイ、エジ、これを食べてみろ!」。トロンゴイは「神様は食べるなと言った。おれは食べないぞ」と言った。その後、蛇は女に実を与えた。エジはこれを食べってしまった。食べるとその実は甘かった。エジはその実を剥いて、トロンゴイの口に入れた。すると、彼らの体毛が抜けてしまった。彼らは恥ずかしくなつて、一人はある木に、もう一人は別の木にそれぞれ隠れた。

そこに神がやってきて、「トロンゴイよ、エジよ、どこにいる」と叫んだ。二人は「木のところにおりますが出ていくことができません」と答えた。神は「トロンゴイ、どうしたのだ?」と尋ねた。トロンゴイは「私の口にエジが、神様が食べるなと言っていた実を入れたのです」と答えた。神は「エジ、お前はどうしたのだ?」と尋ねた。エジは「私に蛇が食べろと言ったのです」と答えた。神は「蛇よ、おまえはどう

したのだ?」と尋ねた。蛇は「私の体内にコルモスが入ってきたのです。私が言ったのではなく、コルモスが言ったのです」と答えた。神は「コルモスはどうやっておまえの体に入ったのだ?」と尋ねた。蛇は「私が眠っているときに入ってきたのです」と答えた。神は「犬よ、おまえはどうしたのだ。おまえはどうしてコルモスを捕まえなかったのだ」と聞いた。犬は「私の目には見えなかったのです」と答えた。

すると神は蛇を追い出して、「蛇よ、おまえはもうコルモスになつてしまつた。おまえを人間に恨ませ、打たせ、殺させよう」と言った。それからエジも追放し、「私が食べるなと言つた実をおまえは食べた。コルモスの言葉を聞いて、コルモスの実を食べた。おまえはこれから子供を産め!子供を産むときにはひどく苦しみ、やがて死ぬだろう」と言った。それからトロンゴイには「コルモスの実を食べ、私の言うことを聞かず、コルモスの言うことを聞いた。コルモスの言うことを聞く人間はコルモスの国にいる。私の言葉を聞かぬ人間は私の光を見ることができず、私の慈悲を受け取れず、暗い所にいるのだ。コルモスは私の敵だ。そしてコルモスとともに、トロンゴイ、おまえもまた敵となつたのだ。これからはコルモスの実を食べなければ、私の慈悲を受け、私の言葉を聞けば、いつも快適であつたのに。おまえに9人の息子と9人の娘を授けよう。コルモスの慈愛を受け、コルモスの実を食べた。私はもう人間など創らない。自分たちで人間を創る

がいい」と言った。⁽²¹⁾

旧約聖書『創世記』などでなじみある「楽園追放」のストーリーである。『タルアーン』にもあらわれる逸話であるが、アルタイ地方のテュルク系民族はイスラームを受容していないため、これはイスラームによる影響ではなく、さらにさかのぼった時代、ウイグル・カガン国の時代に広がったマニ教を通じた「創世神話」との説がある。⁽²²⁾ マニ教は南下をはじめたテュルクの人々にも広がり、ウイグルのブグ・カガンは七六二年にマニ教を受け入れていた。中央ユーラシアの神話・伝承は、マニ教の影響で神（ウルゲン）と悪魔（エルリク）の關係にみられる二元的觀念が顕著となったという指摘があるが、⁽²³⁾ それをさらにさかのぼる、ゾロアスター教などイラン系の神話的思考との關係も検討する必要がある。

上記の神話に現れた「最初の女エジ」はハワ（イヴ）に同定できる。ハワが登場する「創世神話」はカザフにも伝わるが、こちらはイスラームの影響によるものである。

創造主は、次に大地の主を創るために、大地のへそから土を取って、一つを男の、一つを女の姿で創り、太陽で乾かして、口から息を吹いて、魂を入れた。二人は立ち上がり、生活を始めた。この人類の最初の先祖が、父アダム、母ハワである。のちにこの二人が一つになった。母ハワは妊娠し、双

子の息子と娘から25の部族の国が広がって、地上にあふれた。⁽²⁴⁾

中央ユーラシアの神話における原初の女性は、セム系の「創世神話」の影響を受けた神話の中に登場する。中央ユーラシアという地域が、古来マニ教やイスラームなどの世界宗教と密接にかかわってきたことを示す好例である。

二 女勇者たち

この章では人間の女勇者に注目する。神話に現れる女性ではなく、英雄叙事詩、英雄伝説に描かれる女性の勇者たちである。ここでは三人の女勇者を紹介しよう。

二一 英雄叙事詩『アイスルウ』の女王アイスルウ

ウズベクに伝えられる『アイスルウ』は、イランと戦うトゥラン国の女王・女戦士を描く英雄叙事詩である。⁽²⁵⁾ アイスルウ Oйгулу はトゥラン（トゥーラーン）の女王で、南方のイラン（イラーン）と対立していた。トゥランは、現在の中央アジア、アラル海東部地方の平原地域にあたるとされる。この物語は、イランの英雄叙事詩『王の書（シャール・ナーメ）』でも描かれる、南方のイランと北方の遊牧民トゥランとの長年のライヴァル關係を背景としている。ゾロアスター教の二元論的な考えでは、善神（イラン）と悪神（トゥラン）との闘争の結果、イランが

トゥランを破ると解釈されるが、『アイスルウ』ではその反対側からの視点で、トゥランがイランと戦ってこれを倒すという筋書きであることが興味深い。簡単なあらすじは下記のとおりである。

イランの王ダラがトゥラン国を襲い、多くの人々がイランに連れ去られ、奴隷となった。トゥランの女王アイスルウの一人息子であり、トゥランの軍隊長であった勇士クンパティル〔太陽の勇士〕の意の噂をダラ王は耳にする。ダラは軍隊長パフラヴァン・カイサルにトゥラン侵攻を命じる。魔女コサの考案による姦計によって、天女ベリたちと美酒によりクンパティルは眠らされ、アスカル山の洞窟に囚われたあと、ダラ王のもとに送られた。パフラヴァン・カイサルは、トゥランの人たちからアイスルウのことを聞き、彼女に心惹かれる。パフラヴァン・カイサルの目標は、トゥランを征服し、アイスルウを手に入れることとなった。パフラヴァン・カイサルはアイスルウに、一人息子が虜囚されていることを知らせ、降伏を勧告する手紙を送った。アイスルウ王は怒りにあふれ、「ダラとカイサルを殺して、クンパティルの仇を取るか、私が戦死するかのいずれかである。私はトゥラン国であるぞ。民は渡さぬ。服従はせぬ！この言葉をおまえらの王に言ってみなせよ！」と使者に返答し、戦争の準備をはじめた。

そのころ、パフラヴァン・カイサルの娘アフタバイは、ク

ンパティルの壮麗さを耳にし、ひそかに彼と親しくなった。パフラヴァン・カイサルがトゥランへ出陣すると、アフタバイはクンパティルを救い出した。アフタバイからパフラヴァン・カイサルの行軍を知ったクンパティルは、彼女の助けを得て、決戦の地アスカル山に向かう。

アスカル山でイラン軍とトゥラン軍が対峙した。パフラヴァン・カイサルは四千もの悪鬼デヴを従えていた。兵士たちはデヴを恐れるが、アイスルウは「人間がデヴを恐れるのか？デヴとは私が戦おう」とデヴの大群に入ってしまった。デヴを倒すと、アイスルウとパフラヴァン・カイサルとの一騎打ちが始まった。カイサルの頭は撥ね飛び、胴体は馬から転がり落ちた。それを見た、カイサルの兵士たちは逃げていった。アイスルウのもとにイラン王の衣装を身に着けた若者が近づくと、アイスルウはそれがわが息子であることを知り、クンパティルを抱きしめた。

アイスルウとクンパティルは軍団を率いて、イランに入った。ダラはこれを知って、宮殿から逃げ出した。クンパティルは、町の外に出る前にダラに追いつき、金剛剣でその首を取り、母のもとに届けた。イランの民は、アイスルウ王に平和を求めた。国中に平和と安寧がもたらされ、アフタバイとクンパティルの婚礼が盛大に行われた。²⁶⁾

一般的な英雄叙事詩の主人公の戦士が男性であるのにたいし、

『アイスルウ』では、女性が民や軍隊を率いる英雄として描かれている。上述したセリフからもわかるように、アイスルウは勇敢で強靱な勇士である。女王アイスルウの姿は、人民のために果敢に敵と戦い、勝利に導く理想的な君主像であるとともに、一人息子を愛し、その幸せを望む母親の姿でもある。この女戦士アイスルウは、ヘロドトスが記した、紀元前六世紀ころのマツサゲタイの女王トミュリスとなぞらえられることもある。ヘロドトスによれば、夫に先立たれたトミュリスが女王としてマツサゲタイの国を治めていたが、アカイメネス朝ペルシアのキュロス二世（前五三〇年没）は彼女を妻にしようとして使者を送る。トミュリスはキュロスの狙いがマツサゲタイの征服であることを見抜いてこれを拒絶、キュロスはマツサゲタイを攻めようとするが、リュディアの王であったクロイソスの「肉と酒を用意し、それを罠に敵をおびき寄せる」という助言を受け入れる。その策略は見事成功し、トミュリス女王の息子スパルガピセスは肉を食らい、酒を飲み眠ってしまったため、捕らえられた。やがて両軍は対決する。キュロスは戦死し、マツサゲタイがペルシアを破ったという。²⁷ クロイソスの役割を叙事詩の魔女コサが担っているとすれば、『アイスルウ』はこの出来事が叙事詩となって伝えられてきたものだとする、先行研究における見解もあながち的外れとも言えない。もともと、女王の息子スパルガピセスが酔いから覚めると自害したとのヘロドトスの記述は、叙事詩の結末とは大きく異なっている。ちなみに、ダラ王はダ

リウス（ダレイオス三世）をモデルにしたとの説もある。

二二二 カラカルパクの英雄叙事詩『四十人の乙女』の女

戦士グラユム

カラカルパク人が語り伝えてきた英雄叙事詩²⁸『四十人の乙女 Karpak kazi』もまた女戦士を主人公とする。四十人の仲間とともに侵略者と戦う、トルキスタンの女戦士グラユムが主人公として活躍する。

トルキスタンのアツラヤルというバイ（富者）には六人の息子と一人娘がいた。娘の名はグラユムといった。グラユムは相次ぐ求婚を断り続け、自分が結婚する男性は、恐れを知らぬ勇者であると公言した。グラユムは父からミワル島を譲り受け、砦を築き、四十人の娘とともに戦いの術を磨いた。

ある日、故郷をカルマクのハン、スルタイシャが攻め、人々を連れ去っていった。グラユムと四十人の娘は、スルタイシャを追った。そこに、グラユムを密かに愛していた、ホラズムの勇者アルスランも加わった。アルスランは、妹のアルトゥナイに恋したイランのナーデル・シャアの仕掛けた罠に落ちて、故郷を離れ、グラユムのもとに来たのであった。グラユムとアルスラン、四十人の女戦士たちはカルマクの国に向かい、戦いを始める。グラユムはスルタイシャを殺し、民を救い出し、故郷へ戻る。グラユムはアルスランと結婚する。

だが、ホラズムはイランのナーデル・シャールの攻撃を受けていた。アルスランや仲間たちとともにホラズムに向かったグラユムはナーデル・シャールを倒し、アルスランの妹アルトウンアイを自由にし、ホラズムの人々を解放した。²⁹⁾

島の要塞の中に四十人の乙女と暮らし、戦闘の技を磨き、来るべき戦に備えるグラユムは兄たちよりも秀でた戦士である。彼女はまず、カルマク（十六十八世紀に中央アジアを侵攻したモンゴル系の遊牧勢力）と戦って勝利する。さらに、彼女は仲間とともに、アフシャール朝の初代君主ナーデル・シャール（一六八八一七四七）をモデルとしたと思しきナーデル・シャールに征服されたホラズムを解放する。『四十人の乙女』には古代の母系的な社会の記憶が反映されているとされるが、十八世紀に起こった出来事が主な時代背景である。³⁰⁾ 叙事詩での「ペルシアの征服者」との戦いの描写は、イランとホラズム地方北部、アラル海諸部族との歴史的戦いを反映しているのである。『四十人の乙女』で展開されるトルキスタンとイランとの戦いという構造は、あたかも叙事詩『アイスルウ』におけるトゥラン対イランの戦いを再現したかのように類似する。中央アジアでは、六世紀頃から、テュルクの言葉を話す人たちが波及的に増えていく「テュルク化」が進んだが、現在でもイラン系のタジク語を使う人は少なくない。この地はテュルク系とイラン系の人々に織りなされた歴史的な舞台であった。

『アイスルウ』と『四十人の乙女』は、トゥランとイランのライヴァル関係、ホラズム地方を巡るカルマクやイランとの関係と、その舞台の歴史背景は大きく異なるものだが、いずれも女性の勇者が主人公となって戦い勝利するというあらすじである。中央ユーラシアの騎馬遊牧民は、歴史的に、アマゾネスの伝説を思わせるような女性が戦闘に加わることも珍しくはなかったようである。たとえば、ユーラシアの騎馬民スキタイの埋葬塚から得られた骨格のDNA検査によると、スキタイ人女性の三七パーセントが現役戦士であったことが明らかになったという。³¹⁾ そうした騎馬遊牧社会の女性のあり方も口承文芸は伝えているのである。

二一三 南シベリアの伝承『クバイコ』

最後に、地下世界に赴いて死んだ兄の遺体を取り戻すヒーローを取り上げよう。サヤン山脈の「タタール人」に伝わる、クバイコという名の少女が主人公の物語である。

九つの頭をもつ怪物ジェルベゲン³²⁾は英雄コムデイの頭を切り落とし、地下世界に持ち去る。コムデイの妹クバイコは兄の頭を取り戻すために、地下の冥界に向かう。いくつもの苦難を乗り越え、神が天地を創造したときに生えた世界樹のそばにある、地下界を治めるイルレ・カンの家にたどり着く。九つの部屋を抜け、十番目の部屋に入ると、九人のイルレ・

カンと出会う。イルレ・カンは地中に埋まっている七本の角の羊を地中から抜き出すことができた。兄の頭を返すと約束した。クバイコはこの難題を見事にこなし、兄の頭を返してもらおうと、地上に戻った。兄の遺体を前に涙するクバイコを憐れんだ神は命の水を与える。クバイコが兄の口にその水を三度かけると、コムデイは生き返り、元の力を取り戻したのであった。⁽³³⁾

この伝承の主人公もまた女性である。死んだ兄を生き返らせるため、冥界に赴く彼女の姿はシャマンになぞらえることができ、構造上、シャマニズムということが可能である。⁽³⁴⁾ 主人公が異界へ行って帰ってくるというイニシエーションの図式を形成するあらずじは、テュルクの多くの英雄叙事詩にみられるもので、テュルクの英雄物語の典型的な展開である。イルレ・カンは一―三に登場したエルリクのことである。⁽³⁵⁾ この伝承からは、垂直的世界観や世界樹の存在、地下界の王の存在など、中央ユーラシアの神話的世界がはっきりと示されている。クバイコは兄の死を悲しむ優しい心をもつと同時に、勇敢で、多くの苦難に立ち向かい、また地中の羊を引き抜くだけの力もつたヒロインである。中央ユーラシアの伝承における女性について考える際に、注目すべきヒロインのひとりなのである。

おわりに

本稿では、中央ユーラシアの魅力的な女神や女勇者についてみてきた。また、テュルクの口承文芸が、イラン系やセム系の流れをくむ神話世界や草原の騎馬遊牧民の歴史を伝えていることを示した。東西南北をつなぎ、アジアとヨーロッパ、東洋と西洋とを結ぶ中央ユーラシアを通じて、古来多くの人々や多くの文物が行き交った。世界の神話について考えるうえでも、この地域を無視することはできないはずである。今後、こうした視点を加えた神話研究のさらなる発展が望まれる。

注

(1) 「世界の神話」や「世界神話」、「世界の神様」などをタイトルに含むさまざまな書籍を開いてみても、ユーラシアの中央部がぼつかりと空いていることが多い。しかし、この地域に暮らす人々は古来、口承文芸というすぐれた文化をもち、数々の神話や神話的世界を口承によって伝えてきた。中央ユーラシアは、世界各地、とくにユーラシア大陸の神話を考えるうえで不可欠な地域なのである。

(2) 本稿では、カザフ、ウズベク、カラカルパク、クルグズ(キルギス)、アルタイ、シベリア・タタール、バシコルト(バシキール)などの例を取り上げる。

(3) 篠田知和基『世界神話入門』二〇一七 勉誠出版 五〇ページ

ジ。

- (4) 篠田知和基、丸山顯徳編『世界神話伝説大事典』二〇一六
勉誠出版 一九ページ。
- (5) 同上、二〇ページ。
- (6) 中央ユーラシアと共通点の多いシベリアも同様である。「シベリアの神話は特定のジャンルを指す用語ではない。宇宙の成り立ちや秩序、宇宙観、死生観、靈魂観などに関係した話すべてが神話である。英雄叙事詩、昔話、伝説、あるいは儀礼の中で唱えられる詩歌にも神話と呼ばれるものがある。要するに、神話とはジャンルの枠を超えた用語であり、使用する人によって揺らぎが大きい、きわめて便宜的な用語である。シベリアの先住民族が口伝で伝承してきた物語は大多数が神話だということ(と主張)できる。」齋藤君子『シベリア 神話の旅』二〇一 三 弥井書店 三ページ。
- (7) ウマイについては、篠田知和基、丸山顯徳編『世界神話伝説大事典』二〇一六 勉誠出版 八二二ページ、坂井弘紀『中央ユーラシアの母神ウマイ』『千葉大学ユーラシア言語文化論集十六号』二〇一四などを参照のこと。
- (8) 萩原眞子『いのちの原点「ウマイ」シベリア狩猟民文化の生命観』二〇二一 藤原書店 五〜六ページ。
- (9) Кашикарн, Махмут, *Турк сөздігі 1*, Алматы, 1997, 153.
- (10) 松村一男他編『神の文化史事典』二〇二三 白水社 一一九〜一二〇ページ。Татар мифологиясы энциклопедик сүзлек, Казан, 2011, 148.
- (11) アユ・バトゥルとは「クマの勇者」という意味。背景に狩猟文化が強く感じられる。
- (12) *Батыр сөзі 78: Казак мифтері*, Астана, 2011, 47-49.
- (13) *Древнетюркский словарь*, Ленинград 1969, 611.
- (14) Булаков Л.З., *Сравнительный словарь турецко-татарских наречий 2т.*, СПб, 1871, 315.
- (15) *Татар мифологиясы энциклопедик сүзлек*, Казан, 2011, 148.
- (16) Абрамзон С.М., *Кыргызы, Фрунзе*, 1990, 295
- (17) Кондыбай, Серикбол, *Полное собрание сочинений 5*, Алматы, 2008, 68, 256. さらに「イランのフォークロアにあるフマユン、古シロシアのフォークロアに見られるガマユン鳥の姿と名称は、テュルクのクマイ(フマイ)の姿と名から派生したものであると仮定できる」とする仮説もある。Кондыбай, Серикбол, *Арыкказак мифологиясы 4*, Алматы, 2008, 166.
- (18) オメは、エヴェンキ語で「子宮」「内モンゴル東部で「女陰」ナナイ語で「果・ねぐら・果穴」ウデゲでは子供之魂のある「巢」を意味する。萩原眞子「ユーラシアのウマイ女神」吉田敦彦、松村一男編著『アジア女神大全』二〇一一 青土社 五七九、五八三ページ。
- (19) 坂井弘紀『ウラル・バトゥル パシユコルト英雄叙事詩』二〇一一 平凡社東洋文庫 二二二〜二四ページ。
- (20) ベリについては、松村一男他編著『神の文化史辞典』

- 二〇一三 白水社 四七八ページを参照。
- (21) Раглов В.В., *Образы народной литературы северных тюркских племен 1*, Сб., 1866, 160-162.
- (22) Ögel, Bahaddin, *Türk mitolojisi 1*, 419-420.
- (23) ロット・フアルク著、田中克彦他訳『シベリアの狩猟儀礼』一九八〇 弘文堂 四二―四三ページ。
- (24) *Bağlar sözi 78 : Kazak mifleri*, Астана, 2011, 267.
- (25) ウズベク語の داستان。
- (26) *Ўзбек халқ достонлари 1*, Тошкент, 1957.
- (27) へロドトス著、松平千秋訳『歴史 上』一九七一 岩波文庫 一五―一五八ページ。
- (28) カラカルバク語の داستان。
- (29) Ахметов С., Вахальрова С., *Фольклорлық терминлердің қысқаша сөзlige*, Некис, 1992, 140.
- (30) Сагитов И.Т., *Каракалпакский героический эпос*, Топент, 1962. С.100.
- (31) キャロライン・クリアド・ベレス著、神崎朗子訳『存在しない女たち』二〇二一 河出書房新社 一五ページ。
- (32) 頭が七つあるとされることもある。ジェルベゲンはさまさまな英雄物語に、主人公の敵として登場する。アルタイでは、月蝕の原因はジェルベゲンが月を食べたためだとされる。
- (33) M. Alexander Castren, *Nordische Reisen und Forschungen*, St.Petersburg, 1853, 147-154.
- (34) ミルチア・エリアーデ著、堀一郎訳『シャーマニズム 上』

二〇〇四 ちくま学芸文庫 三五四ページ。

- (35) Магнас Александрович Кастрен, *Сочинения том 2: Путешествие в Сибирь (1845-1849)*, Тюмень, 1999, 340.

※本稿は、二〇二一年六月六日に行われた第四五回口承文芸学会大会シンポジウム「神話と昔話 女性神をめぐる」における報告に加筆したものである。報告にたいして貴重なご意見やご質問、情報をご提供いただいたみなさまに心から感謝申し上げます。

(さかい・ひろき／和光大学)